

2020年度草木染塾 第4回

【タイトル（開催日）】2020年第4回草木染塾（2020年10月21日）

【場所】川崎市黒川青少年野外活動センター

【実施概要】座学：藍染めの歴史と方法、藍の乾燥葉で染め液づくり、手ぬぐいの板締め染め、ストールの重ね染、ストールの絞りによる染め

【スタッフ】講師：奥村具子、矢吹佳枝

【受講者】横井行男、古谷一祐、林公康

【報告者】林公康

【本文】

久しぶりの青空の下での草木染塾となった。

午前中前半は座学で、藍染めの歴史と方法についての講義であった。藍色を染める植物は世界中で様々あり古代より使われてきた。インディゴを含む植物は100種類以上に及ぶとの事。世界史では紀元前3000年ごろ、インダス文明の遺跡から藍染めの染織槽跡が発見されている。日本での蓼藍による染色の歴史は、奈良時代中国から朝鮮半島を経由して伝わった。大仏の開眼供養会で藍染の絹の紐「開眼の褸（る）」が使われたのが、現存する最古の蓼藍で正倉院に保管されている。江戸時代、作業着から高級衣装までに藍染めが使われるようになり、木綿の量産により生活雑貨へも広がりを見せた。明治7年に英国のロバート・W・アトキンソンが日本人の藍染めの着物をジャパン・ブルーと表現した。

藍染めは建染めと言われ、アルカリ性にして還元剤を加えて色素を取り出す。乾燥葉の化学建ては炭酸カリウムとヒドロサルファイトで煮だし、伝統的なスクモ建ては微生物・灰などを使い微生物発酵の力を巧みに利用している。

実技では、蓼藍の乾燥葉200gを4リットルの水を加えて沸騰後15分煮だし、この最初の液はあくが出るので捨てた。液を捨てた後の葉に水3リットルと炭酸カリウム30g、ヒドロサルファイト30gを加え、沸騰後10分煮だした。これを1番液とし、同様の操作で2番液、3番液を作った。この他市販の大和藍も3リットルの水に溶かした。

濃く染まる染め液と薄く染まる染め液を使い、板締め絞りで板をずらして白・薄い紺・紺の3色に手ぬぐいを染め出した。また、クチナシの黄色に染まったストールに藍を重ねて緑色に染めた。さらにインド木綿の布に細かいしわを入れてタコ糸でぐるぐる縛ることで絞り染めを行った。染液の中は黄色をしているが、布を取り出し空気に晒すと緑から青に変化する。色素が酸素により酸化されて変化するものであるがこの色の変化は感動的である。

様々なもので草木染したものに藍を重ね染めすることで、無限の模様や色を作り出すことができる。このような藍染の技術を先人はどの様にして発見したのか、その技術の高さに驚かされるばかりである。



煮出した染め液



出来上がった作品群 1



出来上がった作品群 2



板締め絞りの準備